



喜林
142

不調之氣紀之憂

尊兄之信所壯健不相渝

各方面の内いり盡力相

成國の家のためを彼祝

然し以氣候を以間能

以自愛身病を以生

暖地より出る當月初め

激寒に觸る夜中甚細

逆に鼻及喉頭感冒

病難に今日も

病難に今日も



道と皇及神靈感

宥の爲めに今日も

関連多罪省怒と

實に由田所榮子様

位病え直火公の

上の事就ての相

も有間一兩日中

事との侍者輩積年

諸般尊兄の世

中との出来有る事

突然取田侍を即

とお見えお付何

上とあるお尋ね

鹿島人の唐主思

念慮より

尊兄と相付し

事にお成り誠

忌備と云ふお

新前風勤王と

南史公の英明

論

新前代に親王と恩

閑叟公の英明に因り

論屏息大業の基と

快と感する所なり而

に國家に對し宗家

對し閑叟公に對

故副島先生の如く有

志先輩諸公に對

己れの良心に向ひ奉

愧^疚可^まくし精神の

怯感を保育し始終

渝^す可^まくし才識淺

薄^かくも多年

尊^ん兄の口誦^{くわうじゆ}振^り儆^り

正義公法に原^{もと}

身^みに忠^{ちゆう}孝^{かう}の滋^し誠^{じやう}を

真^ま實^{じつ}も他^たに望^{のぞ}む所^{ところ}を

真^ま實^{じつ}も他^たに望^{のぞ}む所^{ところ}を

真^ま實^{じつ}も他^たに望^{のぞ}む所^{ところ}を

直筆也 望む所なき
其の聊カ天地愧り
さらんことを期すのみ
鹿島人がみ
身先と煩付しを由と
承らぬ相驚はる存
お諭らるるの密情と
海にささるる白砂と
取教あ記の所感と叙
しむ也 不悉

十二月十日

直筆

大隈仁先生
研北